

のんき
～呑喜について～

人生はおでんの如し

吉野作造記念館 館長 田中昌亮



「この物語は、その失われた青春に捧ぐる私の挽歌である。この世から姿を消した一高に捧ぐる一つの悲歌である。この筆をとる二、三日前、私はふたたび思い出の駒場の丘を訪れた。渋谷から帝都電鉄で五分、二つの短いトンネルを横切つて、三両連結の電車は、十年前と少しも変わらぬ『一高前』の駅につく。右に石段を降りて行けば、むかしはそこに『のんき』というすし屋、『一幸』という喫茶店、私たちの事のあることに屯した二軒の店があったのだが、爆撃に焼きつくされたその跡に、むかしをしのぶ由もない。」（わが一高時代の犯罪・高木彬光より）私は「呑喜」はおでん屋と思つていた。

人ならお馴染深い、さもなくばイキ筋の名と間違いられないとも限らない。呑喜は本郷追分のおでん屋で、明治文化研究会と呑喜は必ず付きものであったが、一面先生の最も鼻根にされたおでんやであった。そんな関係で、明治文化研究会の夕食にはおでんと茶飯に決まっていた。」吉野先生の好物は莧莧であったらしい。

木下順二氏は「本郷」の中で詳しく「呑喜」について書いている。「元来は道路の屋台で立ち食いときまっていたおでん屋なるものを、初めて家の中で食うという趣向に仕立てたのは呑喜の二代目だそうである。」

私は平成十年七月二十九日夕方「吉野先生を記念する会」の皆さんと呑喜に行った。その時は四代目の兄弟の方が経営していた。早速私は質問をした。「『わが一高時代の犯罪』という高木彬光の小説にでてくる『のんき』というすし屋さんは『呑喜』と何か関係がなかったでしょうか。」すると店主は奥へ入って行き一枚のチラシを持って来て私に見せてくれたのである。「『どういうわけか一枚だけチラシが残っていたのです。『のんき』は『呑喜』の支店です。』そのチラシの全部をそのまま紹介します。私達はビールとおいしい『おでん』を食べて後にした。」



「先輩曰く 人生はおでんの如しと君亦おでんを愛せよ

而して青春の感激更に新なり

呑喜 おでんとおすし十日開店

此度駒場一高前に開店致すことになりました。

歴史あるのんきのおでん・おすし御賞味下さい

— 高生活の思ひ出に —

帝都電鉄一高駅前 呑喜支店

本店 追分町電車通り

支店 早大正門前通り

電話 小石川 四七六六番